誰かが誰かの為に唄う。

高坂勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰かが誰かの為に唄う。

【Ｎコード】
Ｎ２６０５Ｃ

【作者名】
高坂勇

【あらすじ】
あなたは、誰かの為に、自分を犠牲にできますか？あなたは、誰かの為に、唄ったコトがありますか？あなたは…

プロローグ

歌が聞こえる。
聞いたコトがある歌。
その歌を、一体いつ、どこで、誰が歌っていたかは分からない。
僕は、黙ってその歌を聞いていた。
空を仰ぐと、広がっていたのは黒い雲。
光を僕に届かせなくする為か。
それとも、僕自身が世界を拒絶しているのか。
答えは、分からない。
分からないから、眼を閉じるコトにした。
それが1番楽だから。
そうなんだろ？　神様。

第1章　彼女の初日はロッカーで。（前編）

「緊張するよぉ…」
誰もいない教室の中心で愛を…ではなく呟きを漏らす少女――大久保実華――は、忙しなく辺りをキョロキョロと見渡す。その行動は、盗みを働く泥棒のようだ。

しかし、落ち着けと言う方が無理なのかもしれない。なぜなら今日こそが、彼女の高校生活のデビュー戦なのだから。
「ま、まずは笑顔よね。うん、笑顔…」
鏡を取りだし、笑顔の練習を始める。
実華の歪な作り笑顔が映る鏡の片隅に、黒板の日付が見えた。
――四月二十八日（金）
ちなみに、この学校の始業式は四月三日に行われた。
だが、実華が登校するのは今日が初めてである。
日付を見て、実華は重い溜め息を付く。
「何で…私…」
溜め息の次は、乾いた笑い。実は彼女、始業式当日に事故を起こしてしまったのだ。よって、他の人が校長の長い話を聞いている間、実華はベットで寝ていたワケである。「何で事故っちゃうかな…」
ある意味奇跡だよね、とぼやきながら時計を見れば、そろそろ少し早く登校してくる生徒が来る時間になっていた。（実華は緊張しすぎて二時間以上早く来てしまった）
実華の心臓の鼓動がさらに早くなる。それに便乗するかのように、
「何？　も、もう来ちゃったの？」
足音が聞こえる。実華のクラスである1ー3は廊下の1番奥にあるため、どんどん近づいてくる足音の主は、クラスメイトの可能性が高い。
「どうしよ…まだ心の準備が…」

実華は動揺し、あたふたと周りを見て――
「か、隠れなきゃ！」
――掃除用具を入れるロッカーに身を隠した。別に隠れる必要などないのだが、それを考える冷静さは今の実華にはない。　実華がロッカーに入ったのと同時、教室のドアが開かれる。
（まだ1時間以上余裕があるのに、こんな早く登校してくるせっかちさんはどんな顔よ）自分のコトを棚にあげ、実華は隙間からクラスメイトの顔を確認し…「おぉ！？」思わず声を出した口を抑える。幸い、クラスメイトは気付かれなかったようだ。実華は、再び隙間から覗いた。（男のコ…だよね？）男子の制服を着ているのだから、確実に男子なのだが…それでも、なかなか確信ができない。なぜなら、少年は美しすぎたのだ。何もかもが。太陽の光を吸い取っているように見える、白い肌。その肌で際立つ艶のある黒髪。マスカラではなく、自然なままのはずのまつ毛は長く、茶色の瞳を大きく見せる。（あれ？　どうしたのかな？）

第1章　彼女の初日はロッカーで（中編）

見とれていたと言える実華は、美少年（彼ほど、この言葉が似合う人間はいないだろう）がおもむろに黒板に向かうのを見て我に替える。

彼は黒板消しを手に取り、

（何がしたいの？）

黒板を綺麗にし始める。もちろん、実華にもその行動を理解できない。ただ好奇心旺盛な彼女にとって、美少年の行動は興味を持つのは十分だっだ。

（何？　何なんだ美少年君！）

黒板を一通り消し終わると、今度は自分の鞄をゴソゴソと探り始めた。

（？　タオル？）

取り出したのは白い布。多分、タオルだろう。理解できない実華を置いてけぼりにして、彼は教室から出ていった。

（顔を洗いにでもいったのかな？）

ならば、すぐ帰ってくるはずだ。ここから出ない方が良い。

実華の読みどおり、美少年は2、3分で帰ってきた。再び、黒板の前に立つ美少年。先ほどと、特に変わった様子は見られない。あえて言うなら腕まくりをしている点と、タオルが濡れているくらい…

（まっ、まさか―）

そこまで考えて、ある可能性が見えてきた。そして、彼は実華の予想どおりの行動に出る。

（綺麗好き！？　綺麗好きなんだね美少年君！？）　美少年はタオル――もとい雑巾――でチョーク置きを丁寧に拭き始めた。なんという几帳面さ。

（綺麗好きなのか…なるほどね…）

納得する実華はなぜ気付かなかったのだろうか。彼が本当に綺麗好

きなら、黒板だけではなく、教室を掃除すると言うコトを。
そして、なぜ焦らなかったのだろうか。
今、自分が隠れている場所は、彼に対してもっとも見つかりやすい場所だというのに。
がちゃり、と開かれるドア。対面する二人。見つかった実華は固まるしかなく。見つけた美少年も、やはり固まるしかない。完璧に、二人の時間が止まった。

第1章　彼女の初日はロッカーで。（後編）

「……」
美少年は、何ごとも無かったかのように、無言のままドアを閉めた。
実華の周りは暗闇が戻り、驚きで飛んでいた意識が戻る。
「ちょっと！少しは反応してくれないとこっちが困っちゃうよ！？」
すぐにドアを開け、美少年に猛抗議。
明らかに実華が悪いのに、そんなコトはお構いなし彼に詰め寄る。
「じゃあ一応聞きます。あなたはそこから覗いていたんですか？」
お姫様みたいな顔立ちなのに、無表情な彼の視線が実華を突き刺す。
「…うん、見てた」
実華は正直に答えた。
言い訳ができる状況はではないし、元々、彼女は嘘をつけなかった。
「そうですか……」
美少年はそれ以上何も言わずにその場を離れ、自分の席に座る。
「え？　怒らないの？」
「怒ったところで何も変わらないでしょう？　別に見られて困るコトでもないですしね」
彼は冷静に、完璧に『別に気にしてない』風に振る舞っているつもりなのだろうが、白い頬が赤く染まっていた。
やはり、恥ずかしいのだ。
実華も自分の席、美少年の隣りの席に座った。
「ごめんね、本当に悪気は無かったんだよ？」
「気にしてないって言っているでしょ？　謝るくらいなら、もうこれ以上僕に関わらないようにしてください」
冷たい言葉を残し美少年は頬杖を付いて眼を閉じた。
「…よし！決めた！」
実華はしばらく何か考えているかと思えば、唐突に声をあげた。
そして、美少年の肩を掴み、言い放つ。

「ねぇ、私の友達になってよ」
「はぁ？」
美少年は思考が一度止まったようにじっと実華を見つめ、眼を鋭くする。「あなた、何言ってるんですか？　僕、関わらないで、とはっきり言ったつもりですけど？」
「細かいコトは気にしない！」
「……」
呆れて言葉が見つからない彼には理解ができないのか。実華と言う人間は、見るなと言われたら、無理にでも見たくなる生き物なのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2605c/

誰かが誰かの為に唄う。

2010年12月7日03時07分発行